

可愛い可愛い僕の兄さん

「なあなあちヨロ松う」

「なあに？」

「俺ホットケーキ食べたい！」

「…は？」

ぼてぼてと足音も高らかに僕に擦り寄ってきたおそ松兄さんに、うつかり思い切り不審そうな口を向けてしまう。

「…兄さん、ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？どした？」

「…さっきご飯お腹いっぱい食べてたよね？」

よいしょとその小さな身体を抱っこして、そつとそのまあるいお腹を撫でてみる。

つい一時間前に「あ！しゃげだやったあ！」とおむすびを頬張り、「この味付けすきい！」と玉子焼きを詰め込み、「俺茹でたのより焼いたほうがすき」と嬉しそうにウインナーを口に運んだ結果、ただでさえまあるいお腹がぽんぽんに膨れ上がっていたんだけど。

「…え？なんで…」

「なあなあ！お腹すいたあ！」

「はあ!?このちっさい身体のどこに吸収されたの!?さっきかんっぜんにお腹丸かったよね!」

sample

可愛い可愛い僕の兄さん

可愛い可愛い僕の兄さん

「しらねえよお」

どうしよう、一応ノートに書いておこうかな。

昼食のメニューの下に、『一時間程度で昼食が消化された模様』：うん、書いてて我ながらこれいるの？ってかんじがすごいな。でもまあ何かあったら報告してって言われてるんだから、書いたほうが無難だよな。

そう思ってたペンを走らせていれば、「なあまだあ？お兄ちゃんほっとかされると寂しい」と言いながら机によじのぼってくる兄さん。その頭にはびよこんと生えた三角の耳、もふもふの手足に樂しげに揺れるしっぽ。

「これがデカパン博士の薬の被験バイトした兄さんじゃなければなあ…」

「あ！チョロ松またそれ言う！」

「言わずにいられるか！迷惑ばっかりかけやがって！」

「きゅい？」

「こういう時だけ都合よく獣のふりするんじゃねえよ！」



数日前におそ松兄さんに呼ばれて博士の所へ行った僕が目にしたのは、随分と小柄になった長男

sample

「ねえ！おそ松くんどう思う？」

バンツと大きな音を立ててちやぶ台を叩くのは、我らが永遠のアイドルトト子ちゃん。そんなトト子ちゃんにちやぶ台挟んで攻め寄られて、嬉しくないわけがないよねえーと思っていればおそ松くん！トト子真剣なんだけど！」と怒られてしまう。

「ごめんごめんトト子ちゃん許して！」

「じゃあトト子は何言ってたか言ってみて？」

「え、っと、その…」

「ほら聞いてない！」

「あーごめんなさいごめんなさい！お願い教えて！」

大げさに手を合わせてお願いすれば、「もう！しょうがないんだから！」と可愛らしくぷりぷり怒りながらも一度話してくれた。

「だからあ！チョロ松くん、トト子がアイドルしてた時にマネージャーしてたでしょ？」

「うんうん、あの眼鏡掛けて色々ライジングしてたマネージャーね」

無駄にちゃんとしたスーツ着て手帳なんか用意しちゃって、一時期やっていたマネージャー業は本人も楽しかったらしい。今でも「またトト子ちゃんがアイドルやるなら僕がー」って言ってるくらいだし。まあトト子ちゃん可愛いからわかる。

sample

「「「「「Look at me!!」」」」」」

「「「「「Look at me!!」」」」」」

「その時に知り合ったあの！F6のみんなと！更に仲良くなったの！トト子^を差し置いて！あの！チヨロ松くんが！」

「あゝ…なんかよくわかんないけど気に入られたみたいって言ってたやつね…」

F6。お茶の間の老若男女を虜にする高校生アイドル。

そんなアイドル達と知り合うチャンス！絶対モノにしてみせる！と思卷いていたのはトト子ちゃんだったはずなのに、蓋を開けてみれば親しくなつて連絡先まで交換して帰つてきたのはなんとチヨロ松の方だった。

「みんなあんなにしつかりしてるのに年下でびっくりしちゃった」

「あの有名なアイドルさんたちに敬語で話しかけられてどうしようかと…」

「おそ松兄さんも、もつとしつかりしないとダメなんじゃない？」

目を輝かせて俺に熱弁するチヨロ松。その後ろには「なんで私じゃなくてチヨロ松くんがF6のみんなに話しかけられてるわけ!？」とほつぺたを膨らませるトト子ちゃん。こいつはアイドルなら男でも女でもいいのかよ。つーかコイビトの俺の立場は。

そう思いつつもとりあえずその場ではトト子ちゃんを宥めるのが精いっぱい、まあ本物のアイドル見てテンション上がってるんだろくなあくくらいで放っておいたんだけど…

「あれ、更につてことは」

「そうなの！なぜかおそ松様からお茶に誘われたり、トド松様からショッピングに誘われたりし

sample

これから知りたい君のこと

「あれ取りたいの？ちよつと待ってて！さっきあっちに踏み台あったから！」
その眩しい笑顔を見た時。僕があいつに恋した瞬間だった。

「チョロ松さんおかえりなさい」という声に反射で「ただいま」と返せば、「今日は良い本あったみたいですね」と言われてドキリとする。

「電話が何件か来てたみたいです。また会議終わってるのになんでですか？って言われてるんじゃないですか？」

「はあ…あれ、それ知ってることはトド松さん僕のところに来てたんですか？」

「そうでーす。仕事の依頼メールしましたよっていう確認と、よかったら飲みに行きませんか？ってお誘いだけだったんですけど」

「今日ですか？いいですよ」

「じゃあ十九時にいつもの店で」

そう言つてちらりと僕が手にしている本に目をやったトド松さん。少しだけ意地悪く笑った彼は、「今日は例のいいました？」と言ってくる。

「…今日はいませんでしたね」

「それは残念」

sample

これから知りたい君のこと

これから知りたい君のこと

「別に、良い本見つかりましたから」

「はいはい、そのへんの話はまた後で聞きますから」

手を振るトド松さんを見送って、小さくため息をつく。

…同期とはいえ、トド松さんに話したのは間違いだったかな。

ホワイトボードの自分の名前の所に書いてあった『会議中』という文字を消す。片手には会議資料と自分のノート、それからカバールの掛かった本が一冊。

自分のデスクに戻れば、会議に行く前に置いてあった電話メモの隣に、初たな電話メモが並んでいる。時計を見れば十五時半を回っていて、とりあえず急ぎのものから電話をしていこうと内容を確認する。

買ってきた本は、資料と一緒にデスクの上に。

その本を見れば、今日は会えなかったと残念な気持ちさがこみ上げてくるけれど…だめだ。集中しよう。本は電話が一段落したら、休憩の時に読もう。

そう心に決めて、整理した電話メモを手固定電話に手を伸ばした。

週末の定例会議。

金曜日の十三時に集合して、その週の成果と翌週の予定について話し合う。営業や企画など他の

